

式 辞

校庭の木々のつぼみもほころび始め、春の訪れが感じられる今日の佳き日に、八幡浜市教育委員会教育長 井上 靖様、PTA会長 井上 隆様をはじめ、来賓の方々の御臨席を賜り、愛媛県立八幡浜高等学校 令和七年度 卒業証書授与式を執り行うことができますことは、卒業生はもとより、在校生、教職員一同にとりまして大きな慶びであります。

ただ今、卒業証書を授与された一七八名の皆さん、卒業おめでとうございます。本校での学びを終え、この学び舎から巣立っていく皆さんの門出を心より祝福いたします。

さて、今、社会は人工知能AIの劇的な進化という、歴史的な転換期にあります。AIはすでに、複雑な計算やデータ分析、さらには創造的な分野においても、驚異的な能力を発揮し始めていますが、このAIの時代に、人間は何を求められるのでしょうか。AIが膨大な知識を瞬時に処理し、論理的な回答を導き出す一方で、私たち人間の持つ、感性、倫理観、そして何よりも「失敗を恐れず挑戦し、そこから深く学ぶ力」こそが、独自の価値となると考えます。

ところで、皆さんは、「金継ぎ」という日本の伝統技法を

御存知でしょうか。金継ぎとは、割れたり欠けたりした陶磁器を、漆で接着し、継ぎ目や欠けた部分を金や銀で装飾して修復する技法です。この技法は、室町時代に茶の湯の文化が花開いた頃から発展してきました。千利休の時代には、割れた茶碗を金継ぎで直し、その傷跡を「景色」として愛でるところが、最高級の美意識とされたようです。利休たちは、完璧なものよりも、あえて不完全さを受け入れ、時間を経て変化していくさまに、深い美しさを見出していたのです。

単に元通りに直すのではなく、器が経てきた歴史や物語として肯定するという金継ぎの精神は、近年、世界中の人々からも大きな注目を集めています。大量生産・大量消費の現代において、「不完全さの中に、わび・さびといった美」を見出し、モノを大切に長く使い続けるという日本の文化は、持続可能な社会を目指す、現代の価値観と深く共鳴しています。

卒業の日に、このような話をするのには、訳があります。この金継ぎの哲学は、皆さんの人生における「失敗」や「挫折」に対する、素晴らしい示唆を含んでいるからです。皆さんのこれからの人生においては、思い通りにならないこと、打ち碎かれるような挫折が待ち受けているかもしれないかもしれません。しかし、その「傷」は、決して隠すべき、恥ずべきものではありません。

ありません。むしろ、その困難を乗り越え立ち上がろうとする経験、そのプロセスこそが、皆さんという人間をより深く魅力的にする、かけがえのない「景色」となるのです。

AIは、失敗に伴う痛みや苦悩、そこから生まれる人間的な成長や他者への共感性を理解することはできません。失敗を経験し、悩み、それを力に変えるのが人間の強さ、そして、人に共感し寄り添うのが人間的な魅力であり、AI時代における皆さんの最大の武器となり得ます。

社会に出れば、教科書に載っていない、答えのない問いに直面することばかりです。AIは参考になる情報やデータを提供してくれますが、最終的な決断を下し、その結果に責任を持つのは皆さん自身です。時には失敗し、傷つくこともあるでしょう。しかし、その全てが、皆さんの人生という作品を唯一無二のものにするのです。

金継ぎの器がそうであるように、失敗に対する見方を変え、変化のきっかけや成功への足掛かりとすることで、自身の輝きに変えていってください。皆さんの前途に、豊かで美しい「景色」が広がっていくことを、そして、これからも、たくましく歩んでいかれることを心より願っています。

終わりになりますが、卒業される皆さんのこれからの活躍と健勝を、在校生、教職員一同祈っております。

そして、保護者の皆様、本日はお子様の御卒業、誠におめでとうございます。お子様の健やかな成長を願い、見守ってこられた皆様には、さぞかし御苦勞も多かつたことと存じます。また、今日の晴れの日を迎え、立派に成長されたお子様の姿に感慨もひとしおのことと存じます。教職員一同、心よりお慶びを申し上げますとともに、今日まで本校にお寄せいただきました御支援と御協力に深く感謝いたします。

この四月には、新生八幡浜高校がスタートしますが、新校においても、これまでどおり地域に期待される学校として、更なる発展を目指してまいる所存ですので、今後とも、本校を見守っていただけたら幸いです。

それでは、卒業生の皆さんの前途に、幸多からんことを祈念いたしましたして、式辞といたします。

令和八年三月一日

愛媛県立八幡浜高等学校長 菊池 博喜